

.....絶句 新井素子

下



……絶句

〔下〕

〈JA238〉

昭和六十二年四月十日 印刷
昭和六十二年四月十五日 発行

（定価はカバーに表
示してあります）

著 者 新 井 素 子

発 行 者 早 川 清

印 刷 者 草 刈 龍 平

発 行 所 株式 会社 早 川 書 房

東京都千代田区神田多町二ノ二 郵便番号 一〇一
電話東京(二五二)三一二(大代表)
振替口座番号 東京六四七七九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求
めの書店にてお取替えいたします。

印刷・製本／中央精版印刷株式会社

ISBN4-15-030238-3 C0193

ハヤカワ文庫JA

〈JA238〉

……絶句

〔下〕

新井素子

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

第三部

PART I	素子さん復活！	9
PART II	再び、邂逅	53
PART III	八方手づまり	87
PART IV	次の一波乱	125
PART V	決裂	159
PART VI	わずか三人の逃避行	189
PART VII	夢の中の答	225
PART VIII	黄金のライオン	259
PART IX	最後のたたかい	294
PART X	再調整	338
PART XI	……絶句	373

**E
N
D
I
N
G**

403

あとがき

411

文庫版あとがき

423

・
・
・
絶
句
〔下〕

第三部

PART I 素子さん復活！

「……はあ」

あたし、ため息をついた。体中の神経をリラックスさせて——ようやく、おちついたみたい。うう、先刻まで、ひたすらお腹、痛んでたもんね。

「一郎……信拓……拓……こすもす……あもーる……あ、美弥……ローゼット・ロージー」
落ちつく。ここに、この連中がいるのがそもそも不思議で。

「お宅達、何で……」

「素子さん、せっかく死んで頂いたのに」

あ、西谷さん。あの人のいいおっさん、人に刃物つきたてただけではあきたらず、まだ攻撃してくるみたい。

西谷さん、一郎の手をふりほどいた。顔が赤くなっている。

「私は……できる限り紳士的に、あなたに死んで下さいとお願いしたのに……」

「紳士的であろうがあるまいが、世の中には聞ける願いとそうでないものがあるのよ」

台詞が立派だった割には、あたし、一郎の背中にかくれてたりするけど。

「そうですか」

あ。何か西谷さん——ふてくされているみたい。

「じゃ、いいです。紳士的、やめます」

こう言う——へ？

ふいに、西谷さんの姿が、にじんだ。体の線——アウトラインが、判然としなくなる。震えているような、ぼやけているような——そのぼやけ方、段々ひどくなって、そして。

「や、何！」

拓が叫ぶ。

西谷さんの輪郭はどんどんぼやけ——ついには二重になり——最後には。

西谷さんの体の中から、もう一人の西谷さんが出現してしまったのだ。

二人になった西谷さんの片方——今まで西谷さんだったもの、急に生気を失う。顔色は完全に土気色になり、体をささえていた力が抜けたみたい。そして、そのまま——腕をだしたり、頭をかばったりといった防御の姿勢一切なしに、西谷さん、たおれた。

また。

もう一人の西谷さん——今、そこにたおれた西谷さんからでてきたもの——は。

目をこすった。その変化が信じられずに、何度も目をこすったのだが——どんどん、緑色になっていった。

緑。それも、素直な緑じゃないの。植物の緑のように、目に感じのいい、見ていて気持ちのい

い緑じゃなくて——どぎつい緑地に、黄緑色、黄色の斑点。その斑点も、ちゃんとした水玉やブチではなくて、水彩絵具がにじんだような、嫌に輪郭の判然としない、ぼけたしみみtainなもの。そして、とどめ。ところどころにオレンジのまだら。

「じゃ、いいです。私の、もともとの姿は、地球人の目から見たら多分あんまり気持ちのよいものではないだろうと思って、死んだ地球人の体を借りていたんですが——もう、そんな思いやりなんか、捨ててしまいます」

そして。その、緑のものは、どんどん形をくずしていった。最初は西谷さん型——少し太った、実業家タイプの人間型をしていたのに、まず、顔とか手とか、先端部分が崩れ——どんどん、一種不定型の、どろどろした緑色のものになってゆく。

「気持ち……悪い」

拓、吐き気をこらえているかのような表情で言う。

「あなた……その格好は、あんまり悪趣味よ」

拓程露骨ではないけれど、女の子達——こすもすも、あもーるも、美弥も——一様に、顔をしかめたり、かすかに視線をそらしたりしている。

「これが本来の姿なんだから、文句をつけないで下さい。言わせてもらえば、あなた達人間の方が、余程不気味で気色の悪い格好、してますよ」

今や、地面にもりあがる、悪趣味な緑色の泡のような姿になり果ててしまった西谷さん、それでも律儀に日本語でこう言う。日本語で——その泡、もりあがって、人間の唇や声帯のようなものをわざわざ形成しているのだ。どぎつい緑の泡の中のどぎつい緑の唇。それは何だか、いやら

しい、怪奇なオブジェのようで——この、どこからどう見ても、人間とかけはなれたものの中に、一部分、どこからどう見ても人間のものが混じっているのは、たまらなく気味の悪いことだった。ずる。

粘液質の音をたてて、泡、一步——というか、すこし、こちらへ近づく。あたしを含め、
“絶句”連全員、思わず、一步、しりぞく。

ずる。また、泡、こっちへ近づく。
あたし達、また一步、後退。

何か、いわれのない恐怖を覚えるのだ。生理的な恐怖——あるいは、嫌悪。間違ってもあんなものに触れたくないという。

ところが、情容赦なく、泡、ずるずるとこちらへ近づいてくる。こちらへ——主に、あたし、めがけて。

一步——二步。そして、思わず小走りに。あたし、走って逃げようとする。と。

泡の一番盛りあがっているところが、のびた。そのままゴムのように、泡、一直線にのびると——きゃあああ、あ、あたしの顔の方へやってくる。

思わず、手で払いのけようとする。けれど。その泡には、妙に弾力があり——手で払いのけた分、ぐにゃつとのびただけで——そのままあたしの顔めがけてすすんできて。あたしの首筋に、まわりついたのだ。

べたっとした、とってもつめたい——うん、生ゴムか何かが首にまわりついた気分。そりゃ、気色のいい肌ざわりでは勿論ないけれど、べたべたしなかっただけ、まし。

頭の片隅、理性はそう思っていた。でも、感情は。

もう、何が何だか判らない程に、気持ち悪かったのお。気がつく、と、気狂いじみた叫び声を、あたし、あげていた。

「きゃああああ、いやあああ」

無我夢中で、その泡というかゴムというか元西谷さんをひっぺがそうとする。が、その泡というかゴムというか元西谷さん、意外と力が強くて——一郎と信拓も一緒になってひっぺがってくれたんだけど、全然駄目。まったくとれる様子も見せずに——いや、むしろ、逆。

西谷さんが何をしようとしたのか、今、ようやく判った。この泡というかゴムというか元西谷さん、あたしの首、しめる気だ！ しめる気——も、もう現にしまてる！

喉仏をもろにしめられる。苦しいというよりも、まず、痛い。

「あ、もっちゃん」

ようやく、不気味だ、から、これはひょっとすると危ないかも知れない、に、意識をきりかえた一郎、慌ててあたしの喉仏と元西谷さんの間に、指をつっこむ。けれど西谷さん、しめる力をまったくゆるめようとせず——一郎が必死になってひっぺがそうとしているのを気にもせず——ぐいぐいしめてくる。一郎の指がもぐりこんだ分だけ、あたしの喉、更にしめあげられ、思わず咳こみそうになる。しかし、すでに喉には咳こめるだけの余裕もなく——く、苦しい。こめかみが、がんがんする。頭が破裂してしまいそう。

「信拓の旦那！ 何とかしてくれ」

一郎が叫ぶ。声から落ち着きがすっかりなくなっている。

「こいつ——この化物の力、俺より強い。俺、こいつとの力較べ、負ける」
あたし、目の前が真っ暗になる。

あたしの意識さえしっかりしていれば。例えば、先刻みたいに、破れた血管をつなぐことも、折れた骨を治すことも、そう大変じゃないだろう。でも、あたしの首が、このまましめられて、ついに胴体と切り離されてしまったら。おそらく、意識の持ちようがないのではなからうか。とすると——その時は、おそらく、本当の、最期。

「もっちゃん、刃物だ」

信拓の声。

「刃物？」

その台詞聞いて、急に一郎、元気のよい声をだす。

「そうだ、刃物。それ使えばいいんだ」

一郎、ズボンのポケットからナイフをとりだし、ぱちんとあける。そして、元西谷さんの、あたしの喉にむけてのびてきている部分にあてて、思いつき、ぐいっと引く。

すっと楽に——なかなかならなかった。元西谷さんの、ゴムの触手は、スイッチナイフなんかではまるで切れずに——かといって、かたすぎて歯がたたないという訳でもなく、えーい、こういうのが一番始末に困るわい——一郎がナイフをおすのと一緒になって、ぐんぐん、無制限に伸びてしまったのだ。

「刃物じゃ駄目だよ」

「そんな刃物じゃなくて——何でも触っただけで切れるような、恐ろしい切れ味のナイフ！」

一郎の台詞を、信拓、脇からひったくる。

「何でもいい、電磁メスでも、レーザー・ナイフでも。おい、もっちゃんあんた、SF作家志望だろ！ 二十世紀に存在しないような、どんな刃物だっていいんだ、イメージうかべる！」

イメージ。苦しいよりは痛い頭を酷使して、何とか刃物のイメージうかべる。とにかくよく切れるナイフ――。

無意識にポケットをさぐる。さぐりながら、慌ててイメージを修正。えーと、ボンナイフより、もうちょっと大きなナイフ。

何だか冷たい手ざわりを感じ、その刃物の木でできた部分を握りしめ、ポケットからだす。

「うわ」

拓が、叫んだ。

「なるほど、刃物」

あたし、もう目をつむったまま、その刃物をあたしの喉と一郎の指の間にいれ、外へむかっておす。

「あたっ！」

一郎、慌てて指をひきずりだす。そして。

ぶち、という音がして、息がすごく、楽になった。手から刃物がおち、あたし、そのまま咳こむ。半ば無理矢理しばらくの間、咳をとめられていた状態だったので、咳は当分の間、とまりそうになく――あー、それでも、やりたい時に咳ができるのって、快感。

十五秒くらい咳をすると、一応、喉が楽になった。